

パスカルにおける「精神」の機能とその「偉大さ」について

竹中利彦

序

パスカルが「無益にして不確実」であるとして批判したデカルトにおいて、「精神」とは世界に存在する2つの実体のうちの1つの名である。もちろんもう1つは「物質」の実体であり、世界に存在するものは、神を除けば、この2つの実体に尽きている。この2つの実体は排他的に区別されているから、物質の実体、すなわち物体には精神的な機能は一切ない。したがって、デカルトの考えでは、あらゆる認識は、感覚的なものから形而上学的なものまで、すべて精神的なものである。

しかし、パスカルは存在論的にはデカルト的二元論をとっているものの、認識論的にはデカルトの言う「精神」的なもののうちに「心情」と「精神」を区別している。たとえば、『パンセ』のある断章(L308 ; B793)⁽¹⁾では、「身体から精神への無限の距離は、精神から愛への無限大に無限な距離を表徴する」として、「身体」「精神」「愛」の三つの秩序を区別する。ここで「愛」と呼ばれているものは、同じ断章では「知恵」とも言い換えられており、この知恵は、「心情」が見るものだとなっている。そして、この「愛」において優れた者としてイエス・キリストが挙げられていることから、「心情」が宗教的なものを含む直感的な認識論的機能を持っていることが分かる。

そして、「精神」において優れた者としてアルキメデスが挙げられている(同断章)。『パンセ』中の「精神」という語の用法には少々揺れがあるが、一般的に、精神は推論を含む学問的認識の機能を持っていると言える。

もちろん、神による救済を求めるパスカルはこの三つの秩序のうちで「愛」を、すなわち「心情」の秩序を最高位とする。しかし、ここで関心を惹かれるのは、「精神」にも一定の偉大さを認めている点である(「しかし、世には肉的な偉大にのみ感心して、精神的な偉大などないかのように思っている人々があり、また精神的な偉大にのみ感心して、知恵のうちにさらに無限に高いものはないかのように、思っている人々がいる」(同断章))。本稿では、まずパスカルの心身論において精神とはどのようなものかを見たうえで(1.)、パスカルにおける「精神」の機能について明らかにし(2.)、その機能が「三つの秩序」のうちでどのような地位を占めるのかを検討して(3.)、精神の秩序に固有の価値とは何かを考察したい(4.)。

1. パスカルの心身論

まず、パスカルの心身論を確認する。パスカルは心身問題について、理論的に踏み込んで記述してはいない。しかし、『パンセ』の中の「人間の不釣り合い」を述べた断章(L199; B72)から、彼が人間を精神と身体から構成されるものであると考えていることがわかる。この断章では、「無とすべてとの中間」にいる人間が、その両極端を理解できず、事物の終極もそれらの諸原理も知りえないことが述べられる。そして、事物の認識についてのわれわれの無力は、われわれ人間が、「靈魂 *âme* と身体という、相反し、種類の異なる二つの本性から構成されていること」によって決定的になる、と言われる（ここで「靈魂」と呼ばれるものは、同じ断章のすぐあとで「精神 *esprit*」と言い換えられている）。なぜなら、パスカルによれば、諸事物はそれ自身単純なものであるのに、精神と身体からなる複合物である人間はそれらを完全に知ることはできないからである。さらに、人間が物質からのみできている、という唯物論の主張を、「われわれのうちにあって推論する部分が、精神的以外のものであるということは不可能である」という理由で排除している。以上の記述から、パスカルにおいて人間は存在論的には精神と身体からなっている、つまり、彼は心身二元論を認めていると考えられる。

ただし、パスカルから見れば、精神や身体の本性、そしてそれらの結合の仕方は人間にとって完全に理解できるようなものではない。上述のように精神と身体の複合物である人間にとって精神や身体のような単純な事物の理解は完全なものにはならない。まして、それら単純な事物どうしがどのように結合しているのかを理解することもできない⁽²⁾。したがって、デカルトのように精神や身体の本質が「思惟」「延長」の明証的な観念⁽³⁾として把握されることも、心身の合一が「原始概念」として自明なものとして理解される(1643年5月21日付エリザベト宛書簡、AT III, 665)⁽⁴⁾こともない。

しかし、デカルトのような明証的な理解は到達不能なものだとしても、パスカルが心身の二元論そのものを認めていたことは『パンセ』のもう一つの断章からも明らかである。

「奇跡と真理とは必要である。人間全体を、身体と魂とを説得しなければならないから」(L848; B806)。この断章では、「人間全体」が身体と魂からなっていることが前提されていると言える。ではその「人間全体」に何を説得するのか。『パンセ』の断章の多くは「キリスト教護教論」の構想の下で書かれたものである。つまり、「自由思想にかぶれた当時の社交界の紳士」たちによるキリスト教への攻撃からキリスト教を擁護し、さらに「進んでキリスト教の正しさを証明し、可能な限り読者を信仰のとば口に導く」(塩川, 2007, 143 頁)ことが目的となっていた。上に引用した断章では、この目的を果たすためには、「奇跡」に

よって身体を、「真理」によって魂（精神）を説得することが必要である、ということが述べられている。繰り返しになるが、パスカルは人間が精神と身体からなるということを、学問的な厳密性によって認めていたわけではないにしろ、それを前提としていたことは確かであろう。

2. 精神の機能

2.1 「三つの秩序」

次に、「精神」という言葉でパスカルが意味していたことをできるだけ明確にしていきたい。まず、1. で見てきたように存在論上は身体との二元論を構成する精神であるが、『パンセ』中の「三つの秩序」について述べられた断章(L308; B793)では、身体と愛の秩序のあいだで、それらの中間の秩序に位置することになる。この断章では、冒頭で次のように言われる。「身体から精神への無限の距離は、精神から愛への無限大に無限な距離を表徴する。」身体、精神、愛の三つの秩序は、前二者のあいだに無限の距離を、後二者のあいだに無限大に無限な距離を隔てつつ存在する。これらの秩序は何を意味するのか。同じ断章の中で、まず、身体の秩序は物体や自然、王国や王侯たちやその財産に結びつけられている。次に、精神の秩序は思考やアルキメデスをはじめとする「偉大な天才たち」とその学問的業績に、愛の秩序は「知恵」や「心情」、「聖徒たち」、「イエス・キリスト」に結び付けられている。要約して言えば、身体の秩序は物体と俗世間の秩序であり、精神の秩序は理性的認識や学問の秩序であり、愛の秩序は宗教的な救済にかかわる秩序なのである。そして、身体の秩序における偉大さ（王侯であること、財産を持っていることなど）よりも精神の秩序の偉大さ（学問的知識を持ち、その「発明」を多くの人々に提供することなど）のほうがはるかに優れている。もちろん、これらの秩序におけるよりも愛の秩序における偉大さ（聖徒たちやイエス・キリストの偉大さ）のほうがさらにはるかに優れているとされることは言うまでもないだろう。

すぐに興味が惹かれるのは、存在論上の二元論と、この「三つの秩序」の関係であるが、明らかに、「三つの秩序」は、存在論上の秩序ではない。少なくとも、精神と愛の秩序に関しては、認識論的な秩序と言ってよい側面がある。というのも、精神の秩序は後で見るように推論の能力として学問的認識にかかわるが、愛の秩序は直観的な認識の機能をもつ心情とかかわるからである。

この「三つの秩序」において、宗教的救済にとくに強く結びつく愛の秩序が最も偉大とされるのは「キリスト教護教論」を構想するパスカルの意図から当然であるとしても、ではどうして精神の秩序に、身体の秩序より「無限の距離」によって表現されるほど差のあ

る優れた価値が見いだされるのだろうか。この問題を考える前に、パスカルの言う「精神」の機能を明確にしておきたい。

2.2 精神の機能

パスカルの著作の中の用語法では、「精神」という語は「理性」という語と関係が深い。しかも、パスカルにおける理性 *raison* は、まさに推論する *raisonner* 能力である。このような点は、精神の機能として、知性や意志を数え、さらに情念の感受をも含めるデカルトの用語法とは大きく異なっている。精神を、推論する能力としての理性ととくに考える理由としては、次のように言うことができる。

まず、「精神」と「理性」との関係についてであるが、2.1 に引用した断章(L308 ; B793) で見たように、精神の秩序を代表する者は「アルキメデス」である。アルキメデスは、幾何学者として登場している。そして、パスカルの『幾何学的精神について』によれば、幾何学こそ、「推論の真の規則」(*OCL*, p. 349)を知り、それを守ることで、「誤らない」「もっとも卓越した」論証を行なうことのできる学問なのである。したがって、「三つの秩序」で言うところの精神とは、推論する能力であると言える。

また、フランス語では「理性」と「推論する」の二つの語は、上で挙げたように同一の言葉の名詞と動詞であるのは明らかであるが、『パンセ』のテキスト上でも、「理性」と「推論 *raisonnement*」がそれぞれ、ある能力とその働きとしてとらえられている部分を見つけることができる。たとえば、断章 L110 ; B282 では、われわれ人間が真理を知るのは、「推論によるだけではなく、また心情によって」であると言われる。その上で、「第一諸原理」を知るのは、「心情」によるのであって、「理性」はそれらを知るのにまったくかかわらない、ということが述べられる。すなわち、言葉の形が示す通り、理性は推論する能力なのである。以上より、精神は、推論する能力としての理性としての特徴を持っていると言えるだろう。なお、「第一諸原理」を知る能力としての「心情」についてはこの項の最後に述べる。

では、理性が行なうことのできる推論とはどのようなものか。『幾何学的精神について』においてパスカルが目指すのは「すでに見出された真理を論証し、その証明がまったく論破されないようにそれらの真理を明らかにする術」(*OCL*, p. 348)を示すことである。そして、そのための自分の方法について、幾何学を範として次のように述べている(*OCL*, pp. 349-351)⁽⁵⁾。

(1) 学問における「最も卓越した論証」を形成する理想的な方法は、ある論証に現われるすべての用語を定義し、すべての命題を証明することである。

(2) パスカルのいう定義とは、「論理学者が名目上の定義と呼ぶもの」「幾何学的定義」であり、既知の用語によって明白に記述できるものに、名称をつけることである。たとえば、「すべての二等分されうる数を偶数と呼ぶ」というようなものがこのような定義である。

(3) しかし、定義しようとすれば循環が起こるような語⁶⁾が存在するから、(2) のような定義を論証に現われる語すべてに行なうことはできない。したがって、それ以上定義されることのない「原始語」が存在する。その例としては、「空間、時間、運動、数、同等」などが挙げられている。これらの「原始語」は、自然によってあらゆる人間に同様に与えられた観念*idée pareille*を指示しているという。

(4) 論証に現われる命題についても同様に、証明の及ばない命題というものがあり、それらは原始命題として他の命題の証明を行なう際の原理となる。

(5) したがって、幾何学における完全な論証とは、自然によって与えられる観念に直接結びつく原始語とそれによる定義、そして自然によってその正しさが保証される原始命題である原理を用いて順々に定理を証明していくことによってなされる。幾何学は原始語が示す対象を定義することができず原理を証明することもできないが、双方ともに「自然的な極度の明白さ」を備えているため、その必要がないのである。

以上のような推論によって幾何学的論証が構成される。しかしそれは同時に、理性の行なうことのできる最高度の論証でもある。パスカルによれば、「幾何学を超えるものは、われわれをも超えている」(OCL, p. 349)のであり、上の方法が人間の精神にとって最高のもののなのである。

しかし、原始語や原始命題の「明白さ」は、推論の能力である理性によって知られるのではない。では、何によって知られるのか。先ほど、断章 L110 ; B282 でのパスカルの記述を見た際に、「第一諸原理」を知るのは「心情」であると言われていたことを思い起こしたい。つまり、原理としての原始命題の明白さは、「心情」によって知られる。この断章では、原始語については言及されていない。しかし、「第一諸原理」の例として挙げられているのは「空間、時間、運動、数が存在する」「空間に三次元あり、数は無限である」というものである。これらの原理の中に現われる「空間 (あるいは次元)」「数」などの語は幾何学の原始的な対象、すなわち原始語であろう(cf. Mesnard, 1976, pp. 87-88)。したがって、原始語も原始命題もともに、心情によって知られる。そして、心情による知り方を、パスカルは「直感する *sentir*」と言う(「心情は空間に三次元あり、数は無限であるということを直感する」(同断章))。

つまり、「精神の秩序」という表現における精神とは、推論によって真なる結論を導き出す能力であるが、そのためには、原始語や原始命題を直感する心情の協働が必要であると

ということになる。しかし、2.1 で見たように、心情は、宗教的救済にかかわる「愛の秩序」にとくに関係づけられていたはずである。精神の秩序と、愛の秩序の両方で働く心情は、それぞれ別のものなのか。そうではない。たとえば『幾何学的精神について』第2部「説得術について」で、パスカルは神学的真理が証明によって知られるのではなく神自身がそれを魂のうちに置くことによって知られると述べる。そして、「神は神学的真理が心情から精神に入ることを望み、精神から心情に入ることを望まれなかった」(OCL, p. 355)と言う。神学的真理は、心情によって直感されるのである。また、断章 L110 ; B282 では、「神から心情の直感によって宗教を授けられた人々」という表現があり、推論(理性の働き)による宗教への導きは、そのような神による心情への宗教の授与が行なわれるまで、別の言い方をすれば神によって「信じるように傾け」(L382 ; B287)られるまで「人間的なものにとどまり、救いには無益」(L110 ; B282)なものでしかない、と言われている。すなわち、キリスト教を真に信じること、信仰そのものも、心情の直感によって可能になるのである。要するに、心情は直感する能力であり、直感の対象が神学的真理や信仰そのものの場合には愛の秩序において働き、また、直感の対象が学問の基礎となる語や命題の場合には精神の秩序において理性としての精神に協働するのである。さらに、自然学の場合、諸原理にあたるのは経験(実験 *expérience*) (『真空論序言』, OCL, p. 231)である。経験を原理として、そこから理性による推論によって自然学の知識が結論されていく。

では、このような精神の秩序の偉大さは、どのような理由によるものなのだろうか。次にこのことを考えてみたい。

3 精神の地位

3.1 「精神の王国」

パスカルは自分の発明品である計算機をスウェーデン女王クリスティーナに献呈した際の手紙で、次のように書いている。

私をこの計画(女王への計算機の献呈; 筆者註)へと促した真の動機は、私を等しく感嘆と尊敬の念で満たす二つの事柄、すなわち最高権力と堅固な学識 *science* とが、陛下という神聖なお方の中でひとつに結びあわされているということにあるのでございます。それと申しますのも、権力であれ知識であれ、最高位にまで昇りつめた方々に対しては、私は格別な尊敬の念を抱くものだからであります。私の考えに誤りがなければ、権力においてと同様、学識においても頂点を究めた方々は、王者と見なしするのであります。天分のあいだにも、身分のあいだと同じ位階が存在いたします。臣

下に対する王の権威は、精神が自分より下位の精神に対して持つ権威の象徴にすぎないと私には思われます。すなわち上位の精神が下位の精神に対して行使する説得の権利は、政治的統治における命令の権利に相当するものなのです。この第二の支配権は、精神が身体よりも上位の秩序に属するものであるがゆえに、それだけいっそう高い秩序にあるとさえ私には思われます。さらに、政治的支配権が家柄や財産によって分かち与えられ、保持されるのと異なり、こちらはただ功績によってのみ分与され保持されるために、いっそう公正なものであると思われるのです。(OCL, p. 280)

ここでは、女王クリスティーナが世俗的権力と学識の両方を最高度に備えていることが讃えられてはいるが、引用の後半部からわかるように、学識の属する精神の秩序が、世俗的権力の属する身体の秩序よりも上位であることが強調されている。この手紙は 1652 年 6 月に書かれたものであり、このときパスカルはいわゆる「第一の回心」(1646 年)を経ているものの、パリで「社交時代」を送っていた。そのため、自身の学識とその結果としての計算機の発明を誇る心があったのは確かであろう。それでも、身体よりも精神の秩序をより高い地位にパスカルがおいていたということは間違いない。しかし、1654 年、パスカルは、「哲学者や識者 *savants* の神」ではなく、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」(L913)を感受したことによって、「決定的回心」を経験する。そして、この後に書かれた『パンセ』の断章では、2.1 で見たように、パスカルは精神の秩序の上に愛の秩序を置くことになる。すなわち、「決定的回心」によって彼は、精神の秩序に属する論証によって導かれる信仰ではなく、心情によって直感された愛の秩序に属する信仰に到達したのである。

では、「救いには無益な」宗教しか与えない精神の秩序には、どのような価値があるのだろうか。愛の秩序から見れば、それは身体の秩序と同じく無意味なものなのではないだろうか。

3.2 精神は必要か

ここで、精神あるいは理性と、信仰との関係についての、メナールとモロ＝シールという二人のパスカル研究者の解釈を見てみよう。まず、メナールによれば、理性は信仰を与えることはできない。しかし、人間的に把握可能である限りの宗教的真理は、幾何学的方法によって、つまり精神によって把握可能である(Mesnard, 1976, p. 94)。すなわち、パスカルは『真空論序言』において、知識全体を、権威に基づく知識と、経験（自然学における原理）と推論に基づく知識に区別し、神学を前者に分類する。神学において、権威とは聖書の記述である。そして、推論の能力である理性のみを単独で神学の分野に用いることは

禁じている(OCL, p. 231)。しかし、理性に権威が結びついていれば、正当なものとされるのではないかとメナールは解釈するのである。すなわち、権威が提供するもの、いいかえれば聖書に訊かねばならないことは、原理である。そこから理性を用いて推論することで、啓示されたデータから潜在的に含まれているものを引き出すことができ、それが神学の発展である、とメナールは言うのである。もちろん、しかし、このような仕方ではキリスト教の原理を共有しない自由思想家を説得することはできない。そのためには、自然科学が経験的事実をもとにするように、事実から始める。たとえば「人間本性の腐敗」という事実から、その事実を説明する仮説＝キリスト教へとさかのぼる形で推論が行なわれるのである⁽⁷⁾。メナールの意見では、こうして、あらゆる人間的推論は同一のモデルに帰着する。2.2 でも引用したように、「幾何学を超えるものはわれわれを超える」(OCL, p. 349)。これは精神の秩序の力を示すと同時に、その限界をも示している(Mesnard, 1976, pp. 93-95)。逆に言えば、メナールの解釈では、精神の秩序は、「救いには無益」であるにせよ、神学を発展させる力や、非信者を理性的な推論によってキリスト教の信仰へと導く力を持つのである。

次に、モロ＝シールの解釈でも、精神の秩序に属する理性によって愛する（神を愛する＝信仰を持つ）ことはできない。しかし、彼は理性的なものの重要性をより強調する。彼によれば、人間の理性は、墮落によって恩寵を失った人間を導く唯一の「杖」のようなものである(Morot-Sir, 1996, p. 104)。具体的には、理性は、言語 *langage* を用いることによって、人間の精神と身体に作用し、愛の到来に備えることができる(Morot-Sir, 1996, p. 166)。このような主張は、モロ＝シールによる、パスカルにおける心身問題への解釈に基づく。パスカルは、「自然は互いに模倣する。よい土地にまかれた種は、実を結ぶ。よい精神にまかれた原理は、実を結ぶ」(L698 ; B119)と述べる。これは、身体と精神が互いを似た形式を持っていると読むことができる。このことを裏付けるものとして、二つの断章からの記述が挙げられる。「われわれの頭の中には、その一方にさわると、その反対のほうもさわるように仕組まれた発条があるのではないか」(L519 ; B70)というものと、「人は、普通のオルガンをひくつもりで、人間に接する。それはほんとうにオルガンではあるが、奇妙で、変わりやすく、多様なオルガンである」(L55 ; B111) というものである。前者のテキストは、「頭の中」という表現によって、「脳」と「思考」のどちらもが指示されているように読める。後者では、人間全体が「オルガン」という機械に擬せられている。モロ＝シールはパスカルが人間を単なる自動機械と考えていたということには懐疑的だが、それでも、言語という物質と思考からなる機械が、身体という機械と、理性という論理的な機械の双方に作用すると解釈する。そして、『パンセ』において構想される「キリスト教護教論」は、

その言語によって精神と身体の両方に影響を及ぼして、自己愛のような憎むべき情念を憎むべきものと認識させ、そのような情念に基づいた行動をとらないようにさせることを目的としているというのである(Morot-Sir, 1996, pp. 83-166)。

メナールとモロ＝シールの両者ともに、精神の秩序に属する理性に何らかの力を認めている。メナールの場合には人間の及ぶ範囲における神学的真理の把握と非信者への説得力、モロ＝シールの場合には言語を操って真の信仰が神に与えられるまでの準備をする力がそれである。しかし、パスカルにとって、神による救済、つまり、神がある人に真の信仰を与えるかどうかは、究極的には神の意志による⁽⁸⁾。メナールは、パスカルの考える信仰において「理性は心情なしには済ませられないが、反対に心情は理性なしでも十分である」(Mesnard, 1974, p. 166)と言う。パスカルによれば、推論や証拠、聖書、預言などの助けなしにキリスト教を真に信じる人々(L380 ; B284, L381 ; B286, L382 ; B287)がいて、その人々は神によって「心を傾けられている」ために、「もっとも効果的に信じている」(L382 ; B287)のである。モロ＝シールも、信仰は理性の助けなしにも発現しうるが、そうでない場合には理性だけが信仰の準備のための唯一の道だとする(Morot-Sir, 1996, p. 166)。このように、信仰は最終的には神がその人の心を傾けることによってのみ得られるのならば、精神の秩序において理性を駆使して信仰の準備をすることに、どのような意味があるのだろうか。もちろん、この問題は信仰と理性の問題として、パスカルの神学に関する見解とともに別に検討する必要があるだろう。しかし、本稿では、信仰には本質的には不必要であるにも関わらず、三つの秩序の中で精神の秩序に中間の地位を与え、かつ、その秩序に属するものに「偉大さ」を帰したのはなぜか、ということに問題を限定して考える。

4. 精神の秩序の偉大さ

4.1 秩序のあいだの「無限の距離」と「無限大に無限の距離」

2.1 で引用したが、パスカルは三つの秩序のあいだの関係について、次のように述べていた。「身体から精神への無限の距離は、精神から愛への無限大に無限な距離を表徴する」(L308 ; B793)。ここでは、われわれが知っている身体の秩序と精神の秩序とのあいだの関係が、いまだ知られない精神の秩序と愛の秩序のあいだの関係を表徴している、と言われている。パスカルの言う「表徴する figure」とは、感知しうるものによって感知されないより本質的なものを表現することである(塩川, 2006, p. 66)。そして、秩序どうしのあいだにあるとされる「無限の距離」および「無限大に無限の距離」という表現は、もちろんレトリックである。しかし、数学者でもあるパスカルにおいて、「無限」という語は、秩序どうしのあいだの距離が非常に大きい、あるいはそれらが隔絶されている、ということを示

すためだけに用いられているのではない。メナールによれば、このテキストは、身体の秩序と精神の秩序との関係が、精神の秩序と愛の秩序との関係と類比的であり、それぞれの前項と後項との比が無限大であるということを表現しているのである。すなわち、「身体の秩序／精神の秩序＝精神の秩序／愛の秩序」であり、それらの関係を数で表わすとするなら両辺ともに、「 $1/\infty$ 」であり、「身体の秩序」「精神の秩序」「愛の秩序」は、言ってみれば、等差数列ではなく、等比数列に比すべき仕方と並ぶというのが、パスカルの意図だということである(Mesnard, 1974, p. 72)。メナールの解釈は、身体と精神との両秩序の関係が、精神と愛との両秩序の関係を表徴するということをうまく説明すると考えられる。そして、パスカルは無限というもののパラドシカルな性格をよく知っていた。一方では、無限に1を足してもその性格が変わらないことから「有限は無限の前では消えうせ、純粋な無となる」(L418; B233)と述べている。この観点からは、身体の秩序は精神の秩序の前では無であり、精神の秩序は愛の秩序の前では無である。しかしながら、他方で、無限に小さいものが無ではない場合もある。パスカルはサイクロイドの研究によって、あるいは円の面積を無限に小さい三角形の無限の集合と考える伝統的な計算法によって、無限に微小な要素を無限に集めることによって、有限の面積ができることを知っており、それが、『パンセ』において「有限に等しい無限の空間」(L149; B430)と表現されている。このような視点に立てば、「 $1/\infty$ 」は無ではなく、したがって、精神の秩序も、愛の秩序に対して無限に小さいとはいえ何らかの価値を持つものであると言える。繰り返しになるが、愛の秩序に対し、精神の秩序の持つ価値は無限に小さいということは、一方ではその価値は無に等しいということである。しかし他方では、少なくとも $1/\infty$ の価値を持つものでもあり、無限の持つパラドシカルな性格を認めるパスカルは、この両方の側面を認めていたと言えるだろう。

4.2 精神の秩序で得られる真理

では、具体的には精神の秩序はどのような価値を持つのだろうか。3.2で精神の秩序に属する理性と愛の秩序に属する信仰との関係を問題にした際、理性によって人間は人間の及ぶ範囲で神学を発展させることができるというメナールの解釈を見た。神学において推論によって発見されていく真理は、「救い」、宗教的救済に対しては無益なものであるかもしれないが、真理であることには変わらない。

同様のことが、数学や自然学などの学問全体についても言えるだろう。パスカルは、『パンセ』のある断章で、デカルトの機械論的自然学が、自然を「形状と運動」からなるということに対して、「それは真である」と判定するとともに、自然を構成する粒子がどのよう

な形状と運動を持っているかについて詳述して「機械を構成してみせること」、つまり自然全体を説明しようとするのは「無益であり、不確実」であると批判する(L84; B79)。それでも、それに続くと考えられる「人間の不釣り合い」について述べた断章⁹⁾の冒頭で、「自然的な認識がわれわれを導いていくところはここまでである。もしそれが真でないのならば、人間のうちに真理は存在しない」(L199; B72)と言うのである。この「人間の不釣り合い」の断章では、人間が無限大と無限小の中間にあり、「両極端を理解することから無限に遠く離れており」「事物の終極もその原理も」理解できないとされる。すなわち、パスカルから見れば、デカルトのように自然学の真理性の保証を明証的な観念、ひいては神による永遠真理創造説のようなものに求め、自然全体を一つの学問体系で説明しようとするのは誤りである。しかしながら、それでも人間のうちには、精神の秩序においても真理が存在する。それは、「心情」によって知られる原理、あるいは自然学の唯一の原理としての経験（実験）をもとに、理性による推論を行なって発見できる幾何学や自然学の真理である。

そして、このような真理は、愛の秩序に属する宗教的なものに対しても、決して無ではない。『パンセ』断章 L173; B273 は、「もしすべてを理性に従わせるならば、われわれの宗教には神秘的、超自然的なものが何もなくなるだろう。もし理性の原理に反するならば、われわれの宗教は不条理で、笑うべきものになるだろう」と言う。この断章の前半は、愛の秩序が精神の秩序を無限に超えていることを示している。しかしそれと同時に、断章の後半部分は、精神の秩序に属する理性が、愛の秩序に対しても無ではないことを示している。精神の秩序において心情と理性の協働によって得られる学問的真理は、宗教的救済にとって無益ではあっても、人間のうちにある真理であり、その限りでの価値を持つのである。

結論

パスカルにおいて精神の秩序は、愛の秩序に対して無限小の価値しか持たない。しかしながら、それは同時に無限小なりの価値を持つものである。具体的には、原始的な命題、公理をもとに推論によって構成される幾何学や、経験（実験）をもとに推論される実証的な自然学の真理は、それが愛の秩序に属する宗教的救済には無益であるとしても、人間の力の及ぶ限りでの真理として固有の価値を持つ。デカルトのように学問を神の保証のもとに置くことはできないとしても、パスカルの幾何学や、実証的自然学は以上のような意味での真理性を保持するのであり、その意味で、精神の秩序には偉大さが帰されうるのである。

註

- (1) パスカルの引用は、ラフュマ全集版による。OCLと略記し、その後に頁数を示す。『パンセ』については、Lの後の数字がラフュマ全集版の断章番号である。また、それに併記して、ブランシュヴィック版の断章番号をBの後に示した。また、日本語訳については、『中公バックス 世界の名著 29 パスカル』（中央公論社）および『パスカル全集』（白水社）を参考にしたが、表現を改変した部分もある。
- (2) 「人間は、身体が何であるかを理解できず、なおさらのこと精神が何であるかを理解できない。まして、身体がどういうふうにして精神と結合されるのかということは、何よりも理解できないのである。」(L199; B72) さらにこの後、人間に精神と身体との結合様式が人間に理解不可能であることを述べたアウグスティヌスの言葉が、モンテーニュ『エッセー』第2巻第12章から引用されている(Montaigne, 2009, liv. II, p. 303)。
- (3) よく知られている通り、デカルトの哲学において、ある観念が明証性（明晰判明性）を持つことは、それが真理であることを示している（『哲学の原理』第1部第43節など）。
- (4) デカルトの著作の引用については、*Œuvres de Descartes, publiées par Ch. Adam et P. Tannery*（略称AT）による。ローマ数字で巻数を、続くアラビア数字でページ数を示す。また、註(2)で参照した『哲学の原理』（AT VIII）については、部数と節数を示した。
- (5) 以下の議論の整理は、Khalifa (2003, pp. 131-133)を参考にしたが、叙述の都合上段落分けは筆者が変更した。
- (6) 循環に陥る定義の一例としてパスカルは、真空の実験に関して彼がノエル神父と論争を行った際に神父が述べた、「光は光る物体の光体的運動である(La lumière est un mouvement lumineux des corps lumineux.)」という光の定義を挙げている。
- (7) すなわち、人間の本性が腐敗している(L6; B60)という事実や、かつて人間にあった真の幸福が、今では「まったく空虚なしと痕跡」しか残っていない(L148; B425)という事実から、人間の墮落を説明するキリスト教という仮説にさかのぼるのである。
- (8) たとえば、『恩寵文書』では、次のような表現をアウグスティヌス派のものであるとして支持している。「救いは、ただ神のみによる。栄光は無償のものである。それは欲するものにも走るものにもよらず、憐れみをお与えになる神による。それは〔人間の〕善き業によるのではなく、〔神の〕召し出しによる。」(OCL, p. 283, [] 内は『パスカル全集』第2巻の翻訳による)
- (9) 断章L84; B79と断章L199; B72が続けて読まれるべき文献学上の理由があるということに関しては、Carraud (1992, p. 263)によった。

文献

- Pascal, B. *Œuvres Complètes, présentation et notes de Louis Lafuma, « L'Intégrale »*, Paris, Editions du Seuil, 1963.
- 前田陽一（編）、『中公バックス 世界の名著 29 パスカル』、中央公論社、1978.
- 赤木昭三・広田昌義・支倉崇晴・塩川徹也（編）、『パスカル全集』（既刊2巻）、白水社、1993-1994.
- Descartes, R. *Œuvres de Descartes publiées par Charles Adam et Paul Tannery*, Paris, Vrin, 1996.
- 野田又夫（編）、『中公バックス 世界の名著 27 デカルト』、中央公論社、1978.
- Carraud, V. (1992). *Pascal et la philosophie*, Paris, Presses Universitaires de France.
- Khalifa, J. (2003). « Pascal's theory of knowledge » in N. Hammond (ed.), *The Cambridge Companion to Pascal* (pp. 122-143), Cambridge, Cambridge University Press.
- Mesnard, J. (1976). *Les pensées de Pascal*, Paris, Société d'édition d'enseignement supérieur.
- Montaigne, M. de (2009). *Essais*, 3 vols., Paris, Editions Gallimard.
- Morot-Sir, E. (1996). *La raison et la grâce selon Pascal*, Paris, Presses Universitaires de France.
- 塩川徹也(2007). 『パスカル考』、岩波書店.

〔関西大学非常勤講師・哲学〕